

## “みえる”から“みつめる”視点の育成

そん ちゃんて  
宣 昌大（中学）

### I. はじめに

平成29年告示の「中学校学習指導要領 美術編」では、「伝える、使うなどの目的や機能を考える」表現活動においても、主題を生み出すことが求められるようになった。これにより、表現活動において生徒は常に主題を生み出すことを前提として授業に取り組むことになる。また、授業者も授業の流れの中で、生徒が主題を生み出すための手立てを講じる場面の設定を念頭においた授業展開が求められる。

本校美術科では、2023（令和5）年度の研究テーマを「身体感覚と造形活動の可能性について」と設定した。この研究テーマは、例えば、目隠しをして触覚で作品をつくと今までとは違った感覚の働きが意識されるといった体験や、聴いた音のイメージから作品をつくりだす、といった特定の感覚を働かせることでその感覚を意識させる活動とは一線を画すものである。身体による感受を基に主題を生み出すこと、身体感覚を働かせた作品鑑賞から見えない作者の姿や思いを感じ取ろうとする姿勢、自他の身体を介した感受の相違からこれまでとは違う見方や考え方の気づきなど、自身の既存の知識や概念を“価値”という言葉で表現するならば、その価値を身体感覚によって拡張することを対象とする。

### II. 中学校の授業実践の記録

#### （1）授業実践の概要

本題材は、感情から想起した心の姿を構想し、紙粘土を素材として触れられる彫刻作品を制作する。また、作品を相互鑑賞する際に、見るだけでなく触って鑑賞を行うことで、見た目だけでなく実際に触れることで触り心地や形の特徴を感じ取れるようにした。

作品制作では、制作の目標として「イメージした感情に触れる彫刻作品で表す」とし、主題生成の後に制作を始めるのではなく、素材の触り心地や形を試しながら、自分なりに表したい感情とそれを触り心地や形にするため、制作と主題生成の往還から完成を目指すよう取り組んだ。

#### （2）授業実践における生徒観、題材観、指導観

生徒観として、既習事項から以下のような課題を設定した。目や耳、皮膚などの感覚器官を通して校内中庭に吹く風の通り道を感じ取り、形と音で表すために陶芸用粘土で形づくり、焼成した彫刻作品を中庭に展示することから、表現と鑑賞の学習をしている。生徒は風を感じ取る際、ビニール袋やスランテープなどを用いるだけでなく、手を広げ全身で風を感じ取る様子や、感じた風を追いかけて走りまわるなど、各々が自分なりの方法で風を感じ取る様子がみられた。しかし、粘土による造形表現では、音で表すために風鈴のイメージを基に制作する生徒が多くみられた。音が鳴る構造を考えるために既存の風鈴を模倣しつつ、主題を基に表現をしており、生徒にとっての学びはみられるものの、自分なりの形を追求することに課題があると考えた。

生徒観より、課題について本題材で養いたい力を基に、以下のような題材観で取り組むことにした。生徒観で記したように、粘土による造形表現では条件を既存のものをつなげ、模倣に留まる傾向がみられた。そこで本題材では、感情から想起した心の姿を構想し、触れられる彫刻とすることで形の追究を促す。また、触覚を意図的に働かせる鑑賞を通して、自分にとって大切なものの価値を再確認・再発見することや、制作後に自他の作品に触れることも通して、その形や触り心地、材料などの美しさや工夫などを感じ取り、造形的な見方や感じ方を広げる。

以上の題材観より、指導観として以下のように取り組んだ。感情から想起した心の姿を形と触り心地で表現するため、発想や構想を練る必要がある。そこで、触覚を意識させるため、第1次に鑑賞活動として「自分にとって大切なもの」を持ち寄り、グループでその触り心地を分類し、順に並べる活動に取り組ませる。制作時には、鑑賞で撮影した触り心地の分類を全体で共有し、様々な触り方や感じ取り方を通して感情を形や触感で表す発想を促す。

### （3）題材の目標

本題材全体を通して「感情から想起した心の姿を形と触り心地で表すことができる」を養いたい脂質・能力としての目標とした。また、【知識及び技能】は、身の回りのものの造形的な特徴を触感で捉え、全体のイメージで捉えることを理解する。（〔共通事項〕（1）アイ）、【思考力・判断力・表現力等】は、感情から想起した心の姿を基に主題を生み出し、形全体と触り心地との関係などを考え、心豊かに表現する構想を練る。（A表現（1）ア（ア））、作品の造形的なよさや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。（B鑑賞（1）ア（ア））、【学びに向かう力、人間性等】は、感情から想起した心の姿を基に触覚を働かせ、表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとする。

### （4）題材の評価規準と指導の手立て

本題材における三観点の評価規準と指導の手立て（表1）。

表1 三観点の評価規準と指導の手立て

知識・技能	
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>身の回りのものの造形的な特徴を触感で捉え、全体のイメージで捉えることを理解している。</li> <li>粘土や芯材などの材料や用具を生かし、意図に応じて工夫して表している。</li> </ul>
十分満足と判断できる状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>身の回りのものの造形的な特徴を多様な触り方による触感で捉え、より全体のイメージで捉えることを理解している。</li> <li>粘土や芯材などの材料や用具を効果的に生かし、より意図に応じて工夫して表している。</li> </ul>
努力を要する状況への手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な触り方を共に考えながら、触感で捉えられるよう助言する。</li> <li>粘土の特徴について他の生徒の工夫を紹介し、模倣しながらも自分なりに表現に生かせるよう助言する。</li> </ul>
思考・判断・表現	
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情から想起した心の姿を基に主題を生み出し、形全体と触り心地との関係などを考え、心豊かに表現する構想を練っている。</li> <li>作品の造形的なよさや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。</li> </ul>

十分満足と判断できる状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>より具体的な状況から想起した心の姿を基に主題を生み出し、形全体と触り心地との関係などを考え、心豊かに表現する構想を練っている。</li> <li>作品の造形的なよさや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて自分なりの根拠をもって考えるなどして、見方や感じ方を広げている</li> </ul>
努力を要する状況への手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な体験談を聞き、その時の感情を共に考える。</li> <li>感情をオノマトペにし、触り心地の探索経験とつなげて作品の触り心地を共に考える。</li> <li>目で見るだけでなく、時に目を閉じて触るなど積極的に触ることも伝え、形と触り心地による作品のよさを発見できるよう促す。</li> </ul>
主体的に学習に取り組む	
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情から想起した心の姿を基に触覚を働かせ、表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。</li> </ul>
十分満足と判断できる状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情から想起した心の姿を基に触覚を働かせ、<u>追求的に</u>表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとしている。</li> </ul>
努力を要する状況への手立て	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な体験談を基に発想を促すなど興味を持てるよう共に考え、表現や鑑賞の活動を支援する。</li> </ul>

### （5）題材の指導計画

本題材は表2の通り全8時の指導計画である。教育研究会では、第2次の第1時を授業公開した。

表2 題材の指導計画

次	時	◆学習のめあて ・学習内容
第1次	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆<u>触わることで何がわかるかを知る</u></li> <li>・9人ひとグループで、持参した「自分にとって大切なもの」を触り心地で分類し、順に並べていく（図1）。</li> <li>・「触り心地を並べてみる」に感想を入力し、ロイロノートで提出。</li> </ul>
	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆<u>身近なものの触り心地を再確認する</u></li> <li>・前回の活動から、どのような触り方の分類があったかを紹介する。</li> <li>・身の回りのものの触り心地をオノマトペで表し、ロイロノートに記入して提出、全体で共有する（図2、3）。</li> </ul>
	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆<u>2種類の粘土の特徴を体験から理解する</u></li> <li>・作品制作で用いる2種類の粘土（紙粘土と石粉粘土）を配布。</li> <li>・紙粘土と石粉粘土の特徴を、用具も用いて体験を通して知る（図4、5）。</li> </ul>

第2次	1	◆イメージした感情を触れる彫刻作品として表す ・様々な感情の在り方から、表現したい感情を基に作品を構想し、石粉粘土や紙粘土を用いて制作する。
	2	
	3	
	4	
第3次	1	◆感情を形と触感で表すための工夫や表現方法を知る ・他クラスのひとクラス分の作品鑑賞を行い、「鑑賞シート」に感想を入力し、ロイロノートで提出。 ・「ポートフォリオ」を入力し、ロイロノートで提出。



図1 「自分にとって大切なもの」を触り心地順に並べる

展開①では、前時に行った粘土実験によって硬化した2種類の粘土の触り心地や質感、重量などその特徴の違いを比べ、制作へ活かすよう促す。展開②では、感情から想起した心の姿を、粘土で制作する。その際、形だけでなく表現としての手触りも意識するよう促す（図6）。また、重量によっては芯材の利用も可とする（図7）。

用具の片付け後、まとめとして次回以降の制作につながるよう、どのような触り心地や形が自分のどのような感情を想起させるかを意識して過ごすよう伝える。

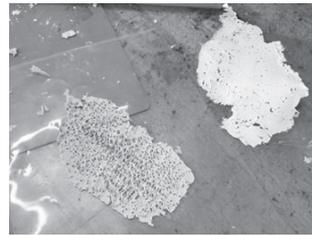


図6（左）触り心地を意識して表面の質感を作り分けている

図7（右）軽量化を図るため、芯材に発泡スチロールを使用



図2、3 身近なものの触り心地をオノマトペで紹介

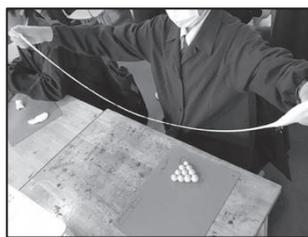


図4、5 2種類の粘土（紙粘土・石粉粘土）の材料実験

### （6）研究会当日の本時の流れ

本時について、導入、展開①②、まとめに区切って述べる。

導入では、前時までに行った触り心地の順並べ、身の回りの触り心地探索といった活動、2種類の粘土の材料実験を振り返る。その後、制作の目標として「イメージした感情を話割れる彫刻作品で表す」ことを伝える。

### （7）研究会後の生徒による作品

図8、9、10は、授業公開した対象クラスによる、完成した作品を生徒自ら写真に撮り、紹介文を添えて提出したものである。

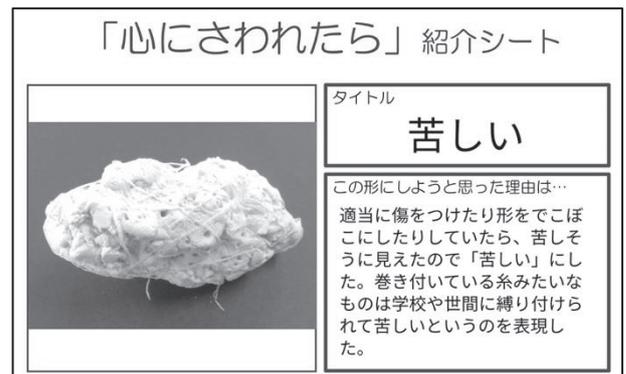
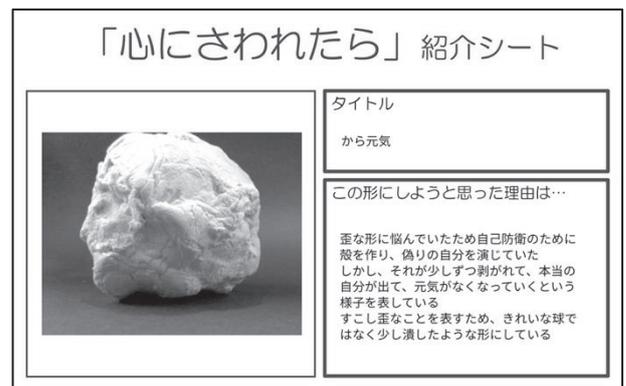




図 8、9、10 公開授業クラスの生徒による完成作品と紹介文

### Ⅲ. 研究協議会の記録

研究協議会の内容について以下に記す。

#### (1) 司会・授業者・指導助言者紹介

中学校授業者 本校教諭 宣 昌大  
司会者 本校教諭 木待 勝貴  
指導助言者 岡山大学 大学院教育学研究科  
教授 清田 哲男 先生

#### (2) 研究協議の概要

協議時間は105分間。参観者には事前にタブレットを配布。生徒が試行錯誤している様子や学びがみられる場面を、写真及び動画撮影しながら授業を参観してもらおう。協議では参観者は4人ひとグループで協議を行う。その際、題材の内容だけでなく、撮影したものを基に、生徒の学びの姿を中心に話し合いを進める。

#### (3) 質疑応答（各グループより）

##### 【課題の難しさについて】

- Q. どう着地させていくのか、心を表現するアドバイスはあるのか。
- A. あえて主だった目標を設定せず、大きな枠としての目標だけにした。表現について、子どもの心の核心をみつめさせる投げかけを意識して、生徒との会話から掘り下げていく。

##### 【素材について】

- Q. 紙粘土と石粉粘土を選んだ理由は。
- A. 1種類では表現が限定されると考えた。そのため、軽量で伸びのよい紙粘土と、硬く重たい石粉粘土を選んだ。

##### 【抽象表現について】

- Q. 抽象表現に限定する必要はないのでは。
- A. 確かに日常的に触り心地への意識を高めることがねらいとしているので、抽象に拘らなくともよ

いのかかもしれない。

#### (4) 指導助言者からの講評

まず、生徒たちへの声かけが柔らかいため、安心して作品をつくることのできる雰囲気、環境づくりがされている。題材については、既存のものから作るのではなく、感じたものから表現する体験を大切に授業づくりがなされている。「何を考えたらいいか」、「自分は何が欲しいのか」それは知識なのか、素材なのか。自分に対して問いかけ、それを明確にしていく過程はこれからの時代に必要な力である。それをふまえて今回の題材では、教師が具体的な目標を設定しないことで、“生徒たちの表現がどのように広がっていくのか”を見取ろうとする挑戦的なものである。

この授業で生徒がどんな成功をし、失敗をしているのか。その生徒の姿を見ていくことが大事である。

### Ⅳ. 今後の展望

#### (1) 授業の反省と今後の展望

本題材では、主題生成と制作を同時並行し、考えながら作るということに取り組みさせた。そのため、生徒の中には、何を作っているのかが自分の中で不明瞭のまま時間を過ごす姿も見られた。そのような生徒に対する手立てとして、過去の体験談を聞き出し、その中から感情に関わるエピソードを基に、そこから触り心地や形につながるよう促していった。具体的な形を対象としない制作では、如何に生徒へイメージを持たせられるか、その取り組みの甘さが露呈したと言える。

今後の展望としては、身体感覚が造形活動に与える影響、特に主題生成について、行為と思考を切り離さずに行なった際の生徒の表現について質的研究の側面から生徒の実態を見取り、論文等にまとめていきたい。

### Ⅴ. 引用・参考文献

- [1] 文部科学省、「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編」、2017